

配達されない三通の手紙

——森鷗外「舞姫」論のためのメモ——

酒 井 敏

明治を代表する二大文豪と呼ばれても、現在、夏目漱石に比して森鷗外の影は薄い。そう言って悪ければ、こう言い換えよう。鷗外の小説の読者は、漱石の小説の読者に比べてはるかに少ない。漱石の小説に比べて鷗外の小説は面白くない、漱石テクストは小説を読む喜びを味わわせてくれるが、鷗外テクストはそうではない、と言われる。本当にそうだろうか。

私には、単に漱石テクストを読むように鷗外テクストを読む試みがなされなかっただけのように思われる。今、一つの気付きだけを手掛かりに「舞姫」を読み直してみたい。研究上の手続きを踏んでいる余裕はないので、言わば遺暦を目の前にして書く感想文となる。ただし、それを紡ぐ私の脳中には、今日までの蓄積がある。トリッ

キー（面白い）な「舞姫」論の輪郭なり示せていれば、その賜物としたい。

僕本一木強人なり。深く詩文に通ずるものにあらず。故に嘗て一たび吾友太田豊太郎が舟中にて作りし記（括弧書き注記略・酒井注）を読みたれど、徒に其事に動されしのみにて、其文の伝ふべきと否を思ふに違あらざりき。

相沢謙吉は、こゝ書き始める。そして、

近ごろ聞けば、鷗外漁史といふものありて、此記に題するに舞姫の二字を以てし、これを国民之友の紙上に公にしたりといふ。嗚呼、是れ既に事を好めることの甚しきものにあらずや。

と続ける。相沢謙吉は「舞姫」と題される以前の、また「太田豊太郎が舟中にて作りし記」としか呼べない、この手記「テクストの最初の読者だったのだ。そして、「鷗外漁史」とは、ご丁寧にも太田の手記に「舞姫」と題して「国民之友の紙上に公にした」「事を好めることの甚しき」やっかいな人物に過ぎない。

鷗外漁史は「舞姫」の作者ではなく、本来、太田の手記は相沢との間に秘め置かれるべき相沢宛の私信だったのである。だから当然、相沢謙吉署名の「舞姫に就きて気取半之丞に与ふる書」¹は、「舞姫」（＝太田の手記）の時空間に存在するテクストでなければならない。

言い添えておくと、これは気取半之丞の誤読をたしなめるスタンスである。気取の「舞姫」²は「鷗外漁史の「舞姫」が国民之友新年附録中に就て第一の傑作たるは世人の許す所なり」と起筆されるのだから。気取は「舞

姫」を鷗外漁史の作品と見てしまっており、「著者鷗外氏」（「舞姫三評（続）」）などと記す一方で、相沢に向かつて「足下が舞姫を改めて「我」となすも「留学生」となすもソハ御勝手次第」（「舞姫四評」）。小説の題号をめぐる議論の部分・酒井注）なども書いてしまふ。手記の筆者は太田であり、題を付けたのが鷗外漁史である以上、テクストの必然を無視した徒な混乱でしかない。

つまりは森鷗外と石橋忍月との論争なのだから、と言ってしまつては語るに落ちる。相沢がテクストに忠実な立場を採つて揺らがないのに対し、気取は「舞姫」が太田＝余の手記であり「我牌（イヒロマアン）」（「再び気取半之丞に与ふる書」其二）であるという性格に無頓着なのだ。論争の勝負は初めからついていたと言えよう。

さて、太田の手記は、「いかにしてかこの恨みを銷せむ」という逡巡の中で、舟中で得られたひとときの孤独の内に「いで、その概略を文に綴りて見む」と起筆される。特定の読者＝宛先を最初から想定していたようには思えない。では、太田はいつ、手記の読者として相沢を選んだのだろうか。それは

嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むころは今日までも残りけり。

と手記を結んだ、正にその時だったに違いない。もとより手記が書き進められる経過はわからず、「今日」がいづなのかもわからないのだが、ここに引用した二文を記すまで太田が書く営みを止められなかったことだけは確かである。逆に言えば、相沢をこのようなアンビヴァレントな存在として記せて初めて、太田は手記の筆を擱けたのだ。

人事不省の熱病が癒えたとき、太田は「プリヨオトジン」に陥り、変わり果てたエリスと見える。発病に至る経緯を知っている太田は、相沢の仕打ちを「此恩人は彼を精神的に殺したり」と記す。その仕打ちが「大臣には

病の事のみ告げ、よきやうに繕ひ置いてくれた、つまり自分を無事に帰東させるための配慮とセットだと理解していても、相沢をエリス殺しの張本人と名指していることに変わりはない。

個人の尊厳は、いやここでは直接に愛と呼ぼう。愛は全てに優先すると考える立場からは、にも関わらず相沢を得難い「良友」と呼び続ける太田は異常に見えるに違いない。例えば気取がそう受け取っているように。しかし、なぜ太田はエリスの「愛」を選ばなかったのか、という気取の詰問は、相沢にとって愚問でしかならう。相沢は、

彼にして家に帰りし後に人事を省みざる病に罹ることなく、又エリスが狂を発することもあらで相語るをりもありしならば、太田は或は帰東の念を断ちしも亦知る可らず。

と太田が「愛」を選ぶ可能性があったと認めた上で、共に帰東できたことを「僥倖」と呼び、気取を一蹴する。「たら・れば」を仮定できたとしても、太田にとって全ては、もはややり直しのきかない完了した出来事なのだ。太田の手記は彼の体験の記録であつて、そう生きてしまった以上、違う生き方を選ぶ自由など、そもそも彼に与えられているはずもないのである。

だからこそ、太田は相沢を得難い「良友」と記した。今後も相沢は、にも関わらずだからこそ引き裂かれた存在として、太田の「良友」であり続けるだろう。太田が先の二文を記せたことは、開かれてある他者の世界に彼が参入した証に他ならない。

つまり、太田の手記とは、相沢という他者との出会いを果たすまでの経緯の記録だったのだ。太田は、言わば葛藤を抱えてしか相沢と向き合えない。そのあり様は、専ら太田自身に向ける「愛」を通して叙述されるエリスとは明らかに違ふ。太田が出会えたのはエリスではなく相沢だったのであり、結末の二文は、改めて彼がそのよ

うな存在としての相沢を選ぶ、とする宣言ないし告白なのである。

このような告白の受け手として、相沢本人が最もふさわしいことは、もはや言を俟つまい。見てきたように、太田の手記は、言わば結果として相沢に宛てた私信となったわけだが、私信だったからこそ、相沢がこの手記の最初の読者となったのである。しかし、この私信は相沢に正しく受け取られはしなかった。自らに宛てられた私信が「公に」されるのを黙過しているからである。相沢は鷗外漁史が何者かを知らないようだし、太田と鷗外漁史との関係もわからない。しかし、それが私信である以上、先にも述べた通り、太田の手記は本来、「良友」と呼び「友」と呼ぶ二人の間に秘め置かれるべきだったろう。相沢は確かに手記を読みはしたが、その読み方は手記に込められた太田の思いに忠実ではなかった。その意味において、太田の手紙は相沢には届かなかつたと言えよう。

手紙を受け取ってはいても、そこに込められたメッセージが受信者には伝わらない。そんな状況を、本稿では配達されない手紙のモチーフと呼ぶ。太田の手記も含めて、「舞姫」というテキストでは、このモチーフが三度繰り返される。ここで、残りの二通の様相を確認しておこう。

一通目は、「この二通は殆ど同時に発したるものなれど、一は母の自筆、一は親族なる某が、母の死を、我がまたなく慕ふ母の死を報じたる書なりき」と記される、言わば母の死と引き換えに書かれた、彼女の「自筆」の手紙である。当時の郵便事情を考えれば、確かに免官やそれに至る息子の不行跡を諫める「諫死」の手紙と読むの

は無理があるかも知れない。しかし、「我生涯にて尤も悲痛を覚え」「涙の迫り来て筆の運びを妨」げられるので「書中の言をこゝに反覆するに堪へ」ないとまで記されるこの手紙は、「諫死」の手紙と同等の重みを持っていたであろう。しかし、この手紙は太田には配達されなかった。母のメッセージとは正反対の効果をもたらすことになるのだから。

公使に免官を告げられ、即時帰国か寄る辺なき身で留まるか、その決断までに与えられた「一週日の猶予」の間に、太田はこの母からの手紙を読む。そして、この「危急存亡の秋」に「悲痛慷慨の刺激によりて」エリスと「遂に離れ難き中」になってしまつた。「一人子のわれを力になして世を渡る母の心」に沿って、「名を成し」「家を興」すどころか、不行跡を重ねる方向に舵を切る結果を招いたと言えよう。「某新聞社の編輯長に説きて」太田を「社の通信員となし、伯林に留まりて政治学芸の事などを報道」させることで生活の資を得られるように差配した相沢も、ここではその背中を押したことになる。母の手紙について記す手記のことは、手紙を読んだ当時の実際の心情より「悲痛」の程度を増しているに違いない。母のメッセージをきちんと受信できず、その促しに従えなかったことが、より苛酷な閱歴を太田に強いた。後悔の念は二重にも三重にも深かったはずである。

太田の「魯国行」の間、エリスは「日毎に書を寄せ」ていたと言う。中でも、最も「思ひせまりて書」かれた「書」と読まれたのが、「否といふ字にて起」こされた手紙である。太田の出発から「二十日ばかり」を経て認められたこの手紙こそ、配達されなかった二通目の手紙に他ならない。

奇妙なことに、太田はこの手紙の内容を手記に記している。「書中の言をこゝに反覆」しているのだ。先に見たようにエリスは「精神的に殺」されている。「涙の迫り来て筆の運びを妨」げられはしなかったのだろうか。この疑問は、エリスに寄せる太田の思いがどれほどの強さだったのかを見直させる契機となろう。次章で改めて

確認するが、手記のことは拾ってゆくと、相思相愛と即断されがちな両者の関係は、専ら「エリスが愛」に支えられた偏頗なものだつたと映るのである。⁴ 極言すれば、天方との初めての面会へ自身を送り出すエリスのふるまいに「かはゆき独り子を出し遣る母もかくは心を用ぬじ」とコメントしてはいても、手記を書き進める帰東の舟中で、より強く太田が思っていたのは母だったのかも知れない。

さて、二通目の手紙である。太田を「思ふ心の深き底を」彼の不在によつて見極めたエリスは、「此地に」「我愛にて繋ぎ留めでは止まじ」と宣言し、どうしても「東に還」るなら連れて行つてくれ、と記す。「いたく争」つたけれども母親は説得済みであり、「大臣の君に重く用ゐられ玉はゞ、我路用の金」は都合してもらえはらず、「縦令いかなることありとも、我をば夢な棄て玉ひそ」と、自らの真情＝「愛」の深さを突き着けるのである。

しかし、この全身全霊を賭けたメッセージも、受信者である太田に受け止められることはなかった。むしろ、自身の「地位を明視し」た太田を追い詰める結果にしかならなかったのである。そして、母の手紙が逆にエリスとの関係を深める契機となつたように、追い詰められた太田の心は大きく揺らぎ、その手紙の促しとは反対の振幅へ振り切ることになる。配達されない手紙のモチーフが繰り返されているわけだ。

相沢と面会した場面では「棄て難きはエリスが愛」と記しつつ、「この情縁を断たんと約し」たと記されていた約束が、この段階では「エリスとの関係を絶たん」と記されている点に注意しよう。面会の場面で相沢は、

彼少女との関係は、縦令彼に誠ありとて、縦令情交は深くなりきとて、人材を知りてのこひにあらず、慣習といふ一種の情性より生じたる交なり。意を決して断て

と語っていた。ここで「情縁」が「関係」に書き換えられているのは、自らを「足を縛して放たれし鳥」と見、「足の糸は解くに由なし」と、追い詰められた果ての自身の立場を認識したからであろう。意識してか無意識か

はともかく、相沢の側に属する語彙が選ばれている以上、太田が「東に還」る、帰国を選ぶことは既に明らかだったと言つてよい。¹⁵

「魯国行」のエピソードはまた、「別離」に対する二人の落差も示している。エリスの「愛」が太田の不在によって一層強まり、彼との別れ難さを自覚させたのに対し、太田の「愛情」は再会したエリスと抱き合うことで改めて浮上したように記される。「この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日毎に書を寄せしかばえ忘れざりき」の一文にも注意しよう。太田が忘れなかったのではなく、エリスが忘れさせなかった、と記しているのだ。「別離」がどれほどの痛手となるか、両者の違いは明らかであり、自らを基準に想像する限り、おそらく太田には自身が「東に還」ることでエリスが被る痛手の深さが正確には予測できなかったのである。関係の偏頗さ、二人の行き違いは、こんな所にも孕まれていたと言えよう。

このように、「舞姫」は配達されない三通の手紙で構成された小説である。太田豊太郎が二通の手紙を受信し損ねることで物語が展開し、そんな彼の手紙も彼の望んだようには受信されなかった。しかし、豊太郎はかつて、はるかに素朴な発信者だった。再び太田の手記に戻って彼の手記に宛てた私信の正体を探り、小説が読者にどのようなメッセージを伝えているかを明らかにしよう。

「五年前」「西に航せし昔の」太田が「筆に任せて書き記したる紀行は」「当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされ」た。もちろん「今日」の太田は「心ある人はいかに見かけむ」と、それらの文章に価値を認めて

いない。しかし、ここからは「目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新からぬはな」い自身の見聞に素直に心を動かす、外界に開かれた太田の姿が自然に読み取れよう。そして、相応に幼稚な文章だったとしても、その見聞を太田が感動と共に読者に伝えようとしていたことも。しかし、何故かベルリンに着く早々、太田は一変する。

「我胸には縦ひいかなる境に遊びても、あだなる美観に心をば動かさじの誓ありて、つねに我を襲ふ外物を遮り留めたりき」と、心を閉ざしてしまうのだ。しかし、ここには矛盾がある。先の引用は、「ウンテル、デン、リンデン」の景観を見事なパースペクティブで捉えた名高い一節の後に置かれている。「光彩」「色沢」と記したベルリンの繁華や美観を太田は確実に受容しており、整然と描写できる程に深く認識しているのだ。エリスとの出会いの場面にも同様の指摘が可能だろう。「小説家の筆なければこれを写すべくもあらず」と記しながら、太田の「用心深き」「心の底まで」「徹した」エリスの眼差しを吸い込まれるような魅力は間違いなく表現されている。実は、太田は「小説家の筆」を持っているのだ。

このような矛盾が潜められている以上、たとえ告白だったとしても、太田の手記を書かれてあるままに読み取るのは危険であろう。意図的な書き漏らしや言い繕いなど、手記を記す上での戦略が施されているに違いない。果して、「ウンテル、デン、リンデン」の景観に続く先の引用は、以下の展開の伏線となる。

太田は「活潑なる同郷の人々」とうまく交際できなかったために嘲りや嫉みや猜疑を受け、それが「冤罪を身に負いて、暫時の間に無量の艱難を閲し尽す媒」になったと記す。それは「麦酒」や「球突き」を楽しめない朴念仁で、遊ぶべき場所・遊ぶべき相手と「遊ぶん勇氣なし」と見られた結果であり、その根底には「合歡といふ木の葉」や「処女に」似た女々しくも「弱くふびんなる心」があったと言っ。

しかし、全てその通りだろうか。少なくとも「奥深く潜みたりしまことの我」を見出すまでの「三年ばかり」、先の「誓」を守って着実に「洋行の官命」を果たし、官長にも唯「善き働き手」とだけ思われていた間は違っていたはずだ。言い換えれば、文字通り「頑固なる心と欲を制する力」によって、他の留学生に抜きん出て職務に精励した期間があつたに違いないのである。やや皮肉な言い方をすれば、太田はこの「弱くふびんなる心」の故に帰国できた。果敢な部分があつては、その道行をたどれない。だからこそ太田は、その「三年ばかり」を「被働的、器械的の人物にな」る過程として、全て「弱くふびんなる心」に塗り込めたのである。

免官され、公使館の庇護下からも追われ、「交際の疎きがために」そもそも世界の狭かつた太田は、エリスとの世界に閉じ籠もるしかない。そして、こうたどってくれば明らかのように、こうなる可能性は早くベルリンに到着した時点で既に胚胎していた。太田の「誓」は、エリスのみを社会に開かれた窓とする極端な自閉に向かう遠い予兆だったのである。

「明治廿二年の冬」、天方に随行して渡独した相沢と再会し、「某新聞社」への「通信」のみで繋がっていた故国が具体的に出現するまで、太田の世界はひたすら縮小し、閉じてゆく。その二人だけに閉じられた世界で、エリスは当然のごとくロマンティック・ラブ・イデオロギーの実現を夢想した。座頭シャウムベルヒの「身勝手なるいひ掛け」を退けたエリスは、「愛」ゆえに太田を受け入れ、身籠もつた子に「よもあだし名をばのらせ玉はじ」と正式な結婚を望む。エリスは、言わば太田が直面した「近代」だったのだが、それを相沢は「人材を知りてのこひにあらず」と否定し去る⁽⁸⁾。

「人のたどらせたる道を、唯だ一条にたど」る傾向を持つ「被働的」な太田が、この相沢の促しに従って閉じられた世界から脱け出したのは前述の通りだ。太田はエリスの望みには寄り添えず、相沢と共有していた常識に

寄り添¹⁹う。ここにあるのは「人材」云々の問題ではなく、エリスの側のことばで言えば「愛」と妊娠（セックス）と結婚に関わる文化的差異の問題である。先に見た「別離」をめぐる太田とエリスの行き違いは、この点にも関わっているように。

さて、太田は手記の冒頭近くで「人の心の頼みがたきは言ふもさらなり、われとわが心さへ変り易きをも悟り得たり」と記していた。言わばこれが、手記に綴られる体験を通して得た太田の人間観であろう。母は亡くなり、エリスも「精神的に殺」されてしまったが、この二人に相沢を加えた三人が、太田と最も深く関わったはずだ。そう改めて確認すると、太田がこう記していることに疑問が生じる。

太田は母に対して、「我が母は余を活きたる字書となさんと」と、「活きたる条例となさんと」した官長と並べて批判的な眼差しを向ける。しかし、「字書たらんは猶ほ堪ふべけれど、条例たらんは忍ぶべからず」のように、許容範囲の齟齬に過ぎない。「一人子のわれを力になして世を渡る」上で期待される生き方の一つとして、「我がまたなく慕ふ母」の中に回収可能なのだ。従って、太田が抱く母のイメージが揺らぐことはない。

太田は専ら母の期待に応えようと努めており、「母の心は慰みけらし」や「故郷なる母を都に呼び迎へ、樂しき年を送ること三とせばかり」と孝行を尽くしている。だからこそ、母の手紙について記すことばが「悲痛」さを増したわけだが、例えば「自由なる大学の風にあた」って「まことの我」に気付いたとき、それまでと違って母の期待を桎梏と感じはしなかつたろうか。もっと言えば、当時の社会的制約の下では仕方ないとは言え、生き方を自ら選ぶエリスの姿に、母の期待に潜むエゴイズムを嗅ぎはしなかつたろうか。手記の筆は、決してそうした方向には進まない。母は常に「またなく慕ふ母」であって、太田の心も彼女のイメージも不変なのである。母が太田の人間観の外に置かれるように、巧妙に記されているわけだ。

では、エリスはどうか。太田はエリスと「離れ難き中とな」った場面では「余がエリスを愛する情は、始めて相見し時よりあさくはあらぬに」と記し、ロシアからベルリンに戻って再会したエリスと抱き合う場面では「故郷を憶ふ念と栄達を求むる心とは、時として愛情を圧せんとせしが、唯だ此一刹那、低徊踟躕の思は去りて」と記す。しかし、先に見たように、相沢に「意を決して断て」と諫言された際には、「棄て難きはエリスが愛」と記すのみで、「この情縁を断たんと約」している。自身の「愛する情」を断つ苦痛には言及していないのだ。先の再会で確認された「愛情」も、天方に面会して「様々の係累もあらんと、相沢に問ひしに、さることなしと聞き落居たり」と言われると、それだけでもう押し返せない程度の強さだった。

太田の「愛情」とエリスの「愛」とは、釣り合った重さで記されてはいない。先に、専ら太田自身に向ける「愛」を通して叙述される、と指摘したのは、この偏頗さのゆえである。だからこそ、揺れ動く太田に対して、エリスは「一心」に純粹な「愛」を捧げているように見えるのだが、本当にそれだけだったろうか。ロマンティック・ラブ・イデオロギーの実現を望むエリスの心中には、例えば「大臣の君に重く用ゐられ」ている（と見えた）太田を利用して、より上の階層を目指すなどの、「愛」以外のファクターも実は存在していたかも知れない。言わば太田は、健気で可憐なエリス像を紡ぐことと引き換えに、彼女もまた自らの人間観の外に置き去りにしてしまっただけである。

太田の母やエリスを貶めたいのではない。手記に記されていない部分を敢えて想像することで、太田が彼女たちを或る一面のみの存在に閉じ込め、彼の観る人間から排除していると確認したかったのである。こう確認すれば、にも関わらず／＼だからこそ引き裂かれてある相沢が、唯一太田が出会えた人間だったことも確認されよう。これが、太田の手記を相沢という他者との出会いを果たすまでの経緯の記録と呼んだ所以である。太田の人間

観に照らして、手記は母やエリスを彼の観る人間から排除する方向で書き進められ、唯一の人間として相沢像が結ばれた時点で擱筆された。しかし、それだけではない。熱病が癒えて後、駆け足で結末へと向かうその叙述は、実は太田がエリス殺しの共犯者だったことを明かしている。

時々の揺り戻しはあっても、太田は相沢の諫言を「大洋に舵を失ひしふ人が、遙なる山を望む如く受け容れてのち、この「前途の方鍼」に沿って動く。この道を進めば「別離」を伴う帰国に至るのを承知で、自らの心が「弱くふびん」なために引き摺られるしかなかった、と繰り返しながら。「係累」のない身として帰国を承諾した天方との面会の場面は、その適例であろう。

流石に相沢の言を偽なりともいひ難きに、若しこの手にしも縫らずば、本国をも失ひ、名譽を挽きかへさん道をも絶ち、身はこの広漠たる歐洲大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝て起れり。嗚呼、何等の特操なき心ぞ、「承はり侍り」と心えたるは。

いろいろ弁解してみせても、ここで即答できたのは帰国の選択が既になされていたからに他なるまい。そして、「黒がねの額はありとも、帰りにエリスに何とかいはん」という最大の難問にも相沢が代わって答えを出してくれた。

しかし、結論は本当に決定されていたろうか。相沢の語るところを再び注意深く聞いてみよう。相沢は「エリスが狂を発することもあらで、相語るをりもありしならば、太田は或は帰東の念を断ちしも亦知る可らず」と書いていた。おそらく相沢は、自らの仕打ちがエリスを発狂させる可能性など想定していなかったであろう。たまたま「狂を発」し「相語るをり」が奪われたことを含めて「僥倖」だったのである。手記の中で一度も愛を口にしない相沢に相応しい考え方だと言えよう。

エリスの発狂は、相沢にとってその程度の出来事なのだが、太田は「エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を漣ぎしは幾度ぞ」と記す。そこまで「悲痛」に感じたのなら、心底後悔してエリスの「病牀をば離れ」ず「慙にみとる」、贖罪の生を思い描いても行き過ぎではなからう。しかも、発狂した娘と「黒き瞳」を持つだろつ孫とを抱えて、エリスの母のみが残されるのである。「弱くふびんなる心」の持ち主ならずとも、仮に一瞬だったにせよ、そんな方向に心が揺れるのではあるまいか。にも関わらず、太田は「相沢と議りてエリスが母に微なる生計を営むに足るほどの資本を与へ、あはれなる狂女の胎内に遣し、子の生れむをりの事も頼みおきぬ」と帰国に際して肅々と後始末をつけるのみなのだ¹⁰。手記には、太田に同情を寄せる相沢の姿はもちろん、帰東を決めた太田の僅かな心の揺れさえ記されてはいない。

ここには、「弱くふびんなる心」の太田ではなく、相沢の同伴者として果断にふるまう彼が登場しているように見える。これは、望んでいながら太田が自らは行えなかったことを、相沢が正に代行したという証であろう。エリスが「狂女」となったのは「悲痛」であつても、おかげで愁嘆場を演ずる必要もなく、「別離」は果たされ、予定通り帰東の途につくことができた。太田を相沢の共犯者と呼んだ所以であり、だからこそ太田は私信の宛て先に相沢を選んだのである。

とは言え、太田は「腸田ごとくに九廻すともいふべき惨痛」を負い、「限なき懐旧の情」に「幾度となく」苦しめられた。「われとわが心さへ変り易き」と記す通り、太田の心は何度も大きく振れたが、その深層で彼が相沢と強く結び付けられていったのは疑いない。そして、太田も相沢と同じ、にも関わらず/だからこそ引き裂かれてある人間であつた。手記の筆を擱いたとき、太田は自分が真に求めているのが相沢だと自覚したであろう。にも関わらず/だからこそ引き裂かれてある「良友」を選ぶ告白とは、人間が孤独の中で人間¹¹他者を求める

魂の叫びであり、それを記した私信とは恋文（ラブレター）に他ならない。そう、「吾友太田豊太郎が舟中にて作りし記」は、実は相沢に宛てた恋文だったのである。

しかし、この太田の手紙も、相沢に配達されなかった。恋文は最も秘め置かれるべき私信であるはずだが、相沢それが「公に」されるのを黙過してしまふ。太田の切実な希求は届かなかったのである。太田も自ら二度繰り返したように、考えてみれば、それは当然だったかも知れない。引き裂かれてある葛藤体としての人間は、相手が期待（想定）する一面だけではない、複雑な内面を持つ。その希求が切実であればあるほど、思いが深ければ深いほど、本来、正しく配達される方が稀なのだ。

にも関わらず／＼だからこそ、孤独の中で人間は他者を求める。配達されないと分かっている、わずかな可能性に賭けて、発信を繰り返す。今・この限られた時間内しか存在し得ない、有限の生を生きる我々にとって、他者を希求する＝共にあることと続けることだけが存在理由なのだから。小説「舞姫」は、そうとしかあり得ない我々の実存を照らし出すテキストなのである。

註

- (1) 『しがらみ草紙』 明治23年4月。
- (2) 『国民之友』 明治23年2月。本稿の立場において、こうした書誌情報は余り重要ではない。以下、所謂「舞姫」論争」に関わる初出紙誌名や刊年月等の注記を省略する。
- (3) とは言え、相沢が「吾友太田豊太郎が舟中にて作りし記」と記し、手記にも「今我同行の一人なる相沢謙吉」と記されているように、サイゴンで起草された手記が帰国までの或る時点で攔筆されたことは確かである。

- (4) その意味で謫天情仙が「眞の愛情知らぬ男、一心他愛なき女」と二人を読んだ（「舞姫を讀みて」、『しがらみ草紙 明治23年1月』）のは、正に正鵠を射ていたと言えよう。相沢が「舞姫評中の舊語となす」と記したのも頷ける。
- (5) 他に「一少女の情にかゝづらひて」などのことはもあるが、引用からも分かる通り、手記中、相沢の発言においてエリスとの関係を指して「愛」ということは記されることはない。
- (6) 一般的には「已然形＋ば」の確定条件として「小説家の筆がないので、これを写すべくもない（写すことなどとてもできない）」のように現代語訳されよう。
- (7) それを認めたからこそ、鷗外漁史は「舞姫」と題する小説として「国民之友の紙上に公にした」のだ、とも言えよう。太田の手記に対する相沢との評価・認識の違いも明らかになる。
- (8) 相沢が気取りに向かつて「太田生は眞の愛を知らず。然れども猶眞に愛すべき人に逢はむ日には眞に之を愛すべき人物なり」と、「木強人」を踏み越えた、本稿の立場からはいささか不似合いな啖呵を切るのは、この「人材を知りてのこひ」の範疇のことばと考えれば納得できよう。
- (9) 太田の免官に至る直接の譏言は「屢々芝居に出入して、女優と交る」であつたと記される。言い換えれば、太田が「勇氣」を持って、遊ぶべき場所・遊ぶべき相手と遊んでいれば譏言されはしなかつたわけだ。もし、太田がエリスとロマンティック・ラブ・イデオロギーを共有できていれば、自らの「愛」を楯に、手記の中で「活潑なる同郷の人々」を断罪できたはずである。
- (10) エリスを「あはれなる狂女」とのみ突き放したように記し、生まれてくる自らの血を分けた子どもへの未練もつがえない、と読むのは太田に冷た過ぎるであろうか。

「舞姫」の引用は『鷗外近代小説集』第一巻（岩波書店、13年3月）、「舞姫に就きて気取半之丞に与ふる書」は『鷗外全集』第二十二巻（岩波書店、88年9月）、「舞姫」等は『石橋忍月全集』第三巻（八木書店、95年8月）に拠り、旧漢字を現行の字体に改め、仮名遣いは原文通りとし、ルビ・傍線等は省略した。